私立探偵髑髏～the private detective Dokuro～

黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私立探偵髑髏～ｔｈｅ　ｐｒｉｖａｔｅ　ｄｅｔｅｃｔｉｖｅ　Ｄｏｋｕｒｏ～

【Ｎコード】
Ｎ６９１９Ｙ

【作者名】
黒猫

【あらすじ】
魔法が認められ、科学が幻想のものとなった世界。
一見幸せそうに見えるその世界でも、絶えず事件は起きていた。
そんな世界の中のちっぽけな島『日本』で生まれ育った魔法嫌いな少女、本田明美は、ある日偶然謎の私立探偵、涅　髑髏と出会う。
その二人が出会ったとき、物語の歯車は回りだした。

序章～prologue～

２０１２年の１２月２２日、アメリカは魔法の存在を認め、世界にそれを配信した。
魔法の存在は一週間もしないうちに世界中に知れ渡り、皆が、科学を捨て、魔法を選んだ。
人々は魔法にすべての生活を委ね、便利な暮らしを手に入れていた。
皆が皆、魔法によって笑顔になった。

そう、上辺だけは。

２０１４年、アメリカは魔法と科学を融合させた、無機物から有機物を生み出す『錬金術』を発見。さらにその一年後の２０１５年、それによる生物兵器を開発したと発表した。
世界はアメリカを恐れ、すべての国がアメリカに従順になった。
が、アメリカは生物兵器を世に解き放った。
反乱因子を完璧に潰す為だ。
アメリカが放った生物兵器『ウロボロス』は、世界を絶望の炎で包み、そのすべてを焼き払った。
自らの兵器に恐れを抱いたアメリカは、ウロボロスを放った二年後

の２０１７年、数百人の錬金術師を処刑する『魔女狩り』を実行し、
さらに錬金術に関するデータを、すべて焼き払った。

その悲劇から、１００年。

２１１７年の日本で、物語は始まろうとしていた。

第1話～ｅｐｉｓｏｄｅ：１～

「再生魔法のコツは……」

教卓に立ちドヤ顔で大破したツボを修復している教師をしり目に、明美は机に顔を伏せた。

魔法は嫌いだ。

魔法は科学より簡単に、人の命を奪っていく。

だがみんな魔法の上辺だけを見て、それに気づかない。

ふと、窓の外を見てみる。

明美の目に映ったのは、果てしなく続くビル群と、その上空に飛び交う、魔法を利用した宣伝広告達。

不便な世の中になった。

教師が、明美に何かを怒鳴り散らしている。

かまわない。どうせ対人攻撃魔法は禁止されているんだ。

明美はそう頭の中でつぶやくと、再び机に顔を伏せ、負け惜しみのように汚い言葉を浴びせる教師の声を子守歌に、明美は眠りの世界に旅立った。

昼過ぎ。
皆が食後ののどかなひと時を過ごしているであろうこの時間に、最近２３歳になったばかりのＯＬ、小柳佐奈は路地裏を疾走していた。
別にダイエットを始めたわけではない。
そんなものなど必要ないくらいに、佐奈の身体はスレンダーで、美女オーラを放っていた。
彼女が走っている理由。それは、彼女の数メートル後ろにいた。
「ま……待ってよぉ、佐奈ちゃぁん！」
そいつは、黒いロングコートに身を包んだ、ふくよかな体格の中年男性。
薄い頭には白い鉢巻が巻かれ、そこには隠し撮りをしたであろう佐奈の写真が、大量にプリントされていた。
誰がどう見ても、生粋のストーカーだ。
彼女がストーカーに悩まされ始めたのは、上京してすぐ。
アパートの部屋からでると、必ずこの中年男性が待ち構えていたのだ。
それから、ずっとどこへ行くにも彼と同伴。
恐くなって警察に通報したのだが、警察は何もやってくれない。
魔法で対処しようにも、学校で習うのは「物の修復の仕方」や「手から光を出す方法」などばかりで、戦闘に役立ちそうな攻撃魔法は軍事施設じゃないと習えない。
それに、魔法を放つために必要な『ルーン』を刻むためのペンを忘れてしまったのだ。

これでは、杖だけあっても魔法は出せない。
思い切って怪しい私立探偵に依頼してみたところ、「分かりました。では、依頼料は私の食事係ということでいいですか？」と、快くＯＫがでた。しかも、依頼料金は彼の三食の世話。
見た目はかなりの美青年だから、毎日彼の事務所に行って料理を作るのが、佐奈の小さな楽しみになっていた。
のだが。
「全然助けてくれないじゃない！」
肝心な時に、その探偵は助けに来ない。
現に、彼女は今こんなに走っているのだから。

だが、そんな鬼ごっこも、長くは続かなかった。
行き止まりにぶつかり、彼女は足をとめる。
ストーカーは、すぐそこまで迫っていた。
「佐奈ちゃぁん。君が悪いんだよ？僕というものがいながら、あんな男と……」
もちろんストーカーは佐奈と探偵の関係を勘違いしているだけなのだが、そんなの知りもしない男はバッ！と、佐奈の前でロングコートを脱いだ。
「きゃっ！？」

佐奈は、小さく悲鳴を上げる。

男はコートの下にはなにも身に着けてなく、そのぼってりとした腹部には、見たことのないルーンが刻まれていた。

「君のために、攻撃魔法を習ってきたんだぁ……。さぁ、一緒になろぉ……？」

ジュルリ。

男は唾液を拭いながら、壁にくっついて男から逃げようとする佐奈に迫る。

もう、だめだ！

あのバカ探偵！絶対化けて出てやるんだからぁっ！

佐奈はギュッと目を瞑り、死を待った。

が。

いつまでたっても、魔法の発動音が聞こえない。その代りに聞こえたのは。

「困りますね、うちの料理係に手を出されるのは。」

男の杖を握って首に自分の杖を突きつけている、探偵の姿だった。

「ど……髑髏さん！」

佐奈が、探偵の名前を叫ぶ。

「お前……お前がぁぁぁ！！」

男が、グリンと後ろを向く。その先には、探偵。
見る限り、どこにもルーンは刻まれていない。
魔法が放てない状況のはずなのに彼は、悠然と男の前に立っていた。

「髑髏さん、ルーンは！？」

「はて、ルーン？」

わざとらしく首をかしげる探偵。
佐奈はムッとしながらも、余裕を保っている探偵を見つめた。

「さて……」

探偵が、ユラリと、ストーカーの額に杖をあてた。

「飛んで行ってもらいましょう。」

刹那。

路地裏を、真っ蒼な光が包んだ。
あまりの眩しさに、佐奈はギュッと目を瞑る。
中年男の声は、聞こえない。

が。

「さて、もういいでしょう。」

探偵がそういったとき、佐奈の前にいたはずの中年男の姿は、なくなっていた。

結局授業に耐えられなくなって学校を抜け出した明美は、先ほど自分が眺めていたビル群の間を歩いていた。
昼時だからランチタイムのＯＬでにぎわっているであろうことを考慮しながら、食事ができる店を探す。

そして、ある企業ビルのゴミ捨て場の前に来たとき。

「きゃっ！？」

『何か』が、明美の目の前を横切り、ゴミ捨て場に突っ込んだ。
反射的に目を瞑ってしまった明美だが、恐る恐る目を開ける。

そこにいたのは。

「……おじさん？」

ボロボロなおじさん。ちなみに全裸。

そして。

「さて、通報してもいいわけですが……やはり消しましょうか？」

そんな男の額に杖を突きつける、人形のように整った顔の青年。
そのブルーの瞳は、男をじっと睨みつけていた。

「ひ……ヒィッ！？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6919y/

私立探偵髑髏～the private detective Dokuro～

2011年11月21日06時50分発行